

マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創設しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

text: Max E. Ammann design: DynamiteBrothersSyndicate
translation: Yoshihiro Sugita(本誌)

ハヤ王女の さらなる4年間

ク アラランブルで開催された2006年のFEI総会でヨルダンの前国王、フセイン1世の娘であり、ドバイ首長国の首長、シェイク・モハメド（ムハマンド・ビン・ラシド・アル・マクトム）の第2夫人であるハヤ王女が会長に選出された。これは現スペイン王の姉であるビラール王女を引き継いだものだ。これは予想通りの結果だった。このとき2人のライバル候補がいた。そのひとりギリシャの副大統領は前年に起きたFEI内部での権力争いの果て候補から外れた。もうひとりデンマークのベネディクテ王女で、彼女はきわめて馬術に通じているにもかかわらず、表に立つことが苦手な人と接することを臆するため、会長選出権をもつ100人の関係者の中で彼女を知る者がほとんどいなか

ったのだ。ハヤ王女は事前に周到な準備を整えこの選出に臨んだ。スウェーデンからはPRのプロをイギリスからは多くの尊敬を集める馬術競技会のオーガナイザーを呼び、彼らがキャンペーン用の文書、いわゆるマニフェストを作成したのだ。ここにはあがりちな、成長、勢力拡大、公明正大、有用性、などといった公約用の文言が並ぶだけではなく、選出のあかつきには相当の資金をFEIに提供することを表明していたのだ。会長就任当初、ハヤ王女は面目躍如の働きぶりだった。同年アレンで開催された世界馬術選手権において、ひとりだけでの記者会見を開き、これは出席者に強い印象を残した。ハヤ王女はFEIを馬に関わる人たちのなかよしクラブから、主要競技のスポーツ連盟のようなプロ競技の営利団体に変えたかったのだ。

と ところで、こうしたスポーツ競技連盟の首脳陣の中で英語、フランス語、ドイツ語の2カ国語、もしくは3カ国語すべてに長けた人物は決して多くはない。これは、スイス、ローザンヌのように20のスポーツの国際的連盟に加え、オリンピック委員会である場所では、こうした人材がつねに求められている。この中でFEIはこれまでトップ人事で紆余曲折の歴史があり、適任の事務局長を据えることができずいたため、この団体に職を求める人は非常に少なく、問題ばかりが目についた。そのためFEIの職

員を選ぶにあたり、馬術との関連を前提とするわけにはいかなかった。その結果、FEIの首脳陣はほどほどに有能だが、馬の知識はまったくなくという人たちが占めることとなる。その一方でハヤ王女は次第に独裁色を濃くしていった。ふたりの副会長を交えた評議会は数カ月に一度行われる程度だったが、やがて年に一度になっていく。それを受け第1副会長、スウェーデンのスヴェン・ホルムバークとニュージーランドの第2副会長が辞任に至ったのは当然のことと言えよう。スヴェン・ホルムバークは2010年、ハヤ王女の第2期選出の際の対抗馬だったのだが、初めから彼に勝利の目はなかった。ハヤ王女の資金援助は莫大な金額になっていた。彼女は公約を果たしたのみならず、さらなるプレゼントとして新たな連盟本部ビルを建設したのだ。以前の建物に比べ、みごとに刷新されたビルが生まれた。このプレゼントのコストはおおよそ2500万スイスフラン（日本円に換算して27億円強）と言われる。やがてFEIはふたつのグループに分かれる。ひとつはスウェーデン、ドイツ、オランダ、フランス、スイス、北米各国といった欧米の主要馬術国グループだ。これらの国々はハヤ王女のFEIへの資金提供や、事務局が馬術より営利に傾いていることに疑問を投げかけていた。もう一方のグループは東ヨーロッパの規模の小さな連盟、アフリカ、南米、そしてアジアの馬術に

員を選ぶにあたり、馬術との関連を前提とするわけにはいかなかった。その結果、FEIの首脳陣はほどほどに有能だが、馬の知識はまったくなくという人たちが占めることとなる。その一方でハヤ王女は次第に独裁色を濃くしていった。ふたりの副会長を交えた評議会は数カ月に一度行われる程度だったが、やがて年に一度になっていく。それを受け第1副会長、スウェーデンのスヴェン・ホルムバークとニュージーランドの第2副会長が辞任に至ったのは当然のことと言えよう。スヴェン・ホルムバークは2010年、ハヤ王女の第2期選出の際の対抗馬だったのだが、初めから彼に勝利の目はなかった。ハヤ王女の資金援助は莫大な金額になっていた。彼女は公約を果たしたのみならず、さらなるプレゼントとして新たな連盟本部ビルを建設したのだ。以前の建物に比べ、みごとに刷新されたビルが生まれた。このプレゼントのコストはおおよそ2500万スイスフラン（日本円に換算して27億円強）と言われる。やがてFEIはふたつのグループに分かれる。ひとつはスウェーデン、ドイツ、オランダ、フランス、スイス、北米各国といった欧米の主要馬術国グループだ。これらの国々はハヤ王女のFEIへの資金提供や、事務局が馬術より営利に傾いていることに疑問を投げかけていた。もう一方のグループは東ヨーロッパの規模の小さな連盟、アフリカ、南米、そしてアジアの馬術に

おいては発展途上にある国々だ。ハヤ王女に対抗する20から25の主要国がFEIの活動の80から90パーセントを占めている。しかし、1カ国1議決権という原則から、この主要グループがまとめられる投票数は20から25しかない。対するハヤ王女側は馬術が盛んとは言えないながら、およそ100の投票権を持つ。馬術に貢献の大きい主要国が、その恩恵を受けている対抗グループに数で圧倒されるという矛盾した状況の成り行きとして、2010年、ハヤ王女は会長再選をもぎ取ったのだ。ふたりの候補、スヴェン・ホルムバーク



右:FEI 総会の様子。© Edouard Curchod /FEI
FEI 総会に参加した各国代表の面々。© Edouard Curchod /FEI



11月のFEI総会で会長職を3期続けないことを宣言したハヤ王女。© Richard Juilliart/FEI

ともうひとりのヨーロッパからの候補、オランダのヘンク・ロッテイングフェイスに勝ち目はなかった。ハヤ王女が2006年に選ばれた時、会長は1期4年2期までとするという定款を3期までと変更すること求めていた。そして13年、水面下でハヤ王女の3期目再選への動きが見られている。

この条文の変更に対し、西欧側は強く反発している。このハヤ王女の対抗勢力はエンデュランスが危機的な状況にあることに突破口を見出した。エンデュランスにはハヤ王女の夫のシェイク・モハメドが大きく関与しているからだ。エンデュランスにおいてドーピングと馬の健康管理が大きな問題になっていた。この追及の矛先は中近東の、さらに狭めればアラブ首長国連合のドバイ、その首長であるシェイク・モハメド・ビン・ラシド・マクトムに向けられたものだ。

ロンドンの新聞紙、デイリーテレグラフはエンデュランスで起きている薬物の使用、馬の死、そしてルール違反を盛り込んだ長い記事を掲載した。その記事によるとFEIの統計によれば2005年以降、FEIの全種目で162件のドーピングが指摘されてきた。そのうち34件がエンデュランスであり、その中の20件以上がシェイク・モハメドの厩舎が関わっていると指摘する。

シェイク・モハメドはイギリスで最大の競走馬厩舎を所有している。2000頭を擁するというダーレーとゴールドフィン・レー

シング・ステイブルで広くステロイドの使用が認められた。数週間後、違法の馬用薬物がロンドンのスタンステッド空港に着陸しているシェイク・モハメドのプライベートジェット機から発見された。それを受け、ヨーロッパのある馬術主要国の馬術連盟がエンデュランス問題の解明をFEIに申し入れたが、満足する解答は得られなかった。しばらくすると、この問題についての調査委員会が設けられることになる。そのメンバーのひとりにはサエド・アル・タイヤーで、彼はドバイ・エクエストリアン・クラブの副支配人であり、つまりシェイク・モハメドの関係者だ。それから前ロンドン警察長官、ステイーブンス卿がFEIと調査の契約を結んだ。しかし、彼はシェイク・モハメドにも雇われているのだ。

2013年9月末、予想に反しハヤ王女は3期目の継続を求めないことを宣し、会長職を14年11月に辞すことを公にした。ところがスイス・モントルーで11月に行われたFEI総会では、これに対してさらに予想外の展開見せることになる。エンデュランス問題の追及やハヤ王女の後継者候補探しは議題に上らず、100を超える各国の代表はその正反対の動きを示したのだ。たとえば、エンデュランス問題についてイギリスのアンドリュウ・ファインディングを中心とした調査委員は問題を追及せずに、鎮静化に舵を取った。

このモントルーでの3日間、ハヤ王女の3期目を継続してもら

というゴールに向かいさまざまな動きが見られた。定款の変更を求める回覧には100を超える代表の同意が得られた。このサインの中にはベルギーや米国の代表のものが含まれる。この結果、14年4月29日、特別総会の開催が決定した。この総会で会長職の3期継続のための定款書き換えが承認されるだろう。

ハヤ王女を巡る論争が繰り返されたこれまでの期間に、西ヨーロッパ連盟、米国、カナダのいずれの国もハヤ王女の後継者を見つけ出すことができなかったのは、何という皮肉だろう。ヨーロッパ各国のこの体たらくは、ヨーロッパ馬術連盟が大きな期待のもと設立された数年後に露呈した。この団体がいかに力が無いかはその存在がほとんどの人に知られていないことから明白だ。今から不安なのが、FEIの活動の8割から9割を占めるヨーロッパと北米が、2017年にハヤ王女の後継者を擁立できるのかということだ。

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかたわら、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(AEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど多大な貢献をしてきた。